# 高等部

# 共生学「飛び級社会人」

長岡亜矢子

2022 年度より実験的なカリキュラムとして開始された「飛び級社会人」は、2023 年度より高等部 2・3 年生を対象とした必修授業として実施している。2025 年度は総勢 178 名の生徒が 51 の企業・団体に受け入れられ、短期集中コースには 90 名、定期コースには 88 名が参加した。活動を通して社会のさまざまな仕事や人、価値観に触れることに加え、本年度は、生徒一人ひとりが自身の経験を振り返り、他者と共有する時間をこれまで以上に重視した。また、生徒が受け入れ先から学ぶだけでなく、高校生との関わりが受け入れ先にとっても新たな気づきにつながるなど、双方に学びが生まれる機会となった。

## 1.　運営体制と情報基盤の整備

本年度は、共生学担当の竿代、高松、山本、コーディネーターの長岡を中心に、活動の準備・運営を進めた。新たな受け入れ先の開拓にあたっては「人との共生」「自然との共生」を軸に、魅力的な活動を行う企業・団体へ直接アプローチした。遠方の企業・団体にも実際に足を運び、活動への思いや本授業の趣旨について丁寧に対話を重ねながら、協働関係の構築と新規開拓に取り組んだ。また、博報堂ケトルの原利彦氏からも、縁のある企業・団体をご紹介いただき、活動の幅を広げることができた。受け入れ先との契約関連業務は小泉が担当した。

本年度は、これまで外部の支援を受けていた運営業務の内製化を進め、コーディネーターが事務局業務を担うとともに、オンラインで事務局業務をサポートするスタッフを新たに配置した。

また、受け入れ先の増加に伴い、生徒が各企業・団体の活動内容や情報を閲覧できる企業情報ページを新たに構築するなど、情報管理や事務業務のデジタル化を進めた。あわせて、日報や交通費精算などの運用も見直し、生徒、受け入れ先、教職員が活動に関わるための運営基盤の整備を行った。

## 2.　オープニングセレモニー

活動開始に先立ち、10 月 22 日にオープニングセレモニーを自由学園の記念講堂で開催した。当日は、現地に 23 の企業・団体から 41 名、オンラインでは 13 の企業・団体から 13 名程度、受け入れ先の方々に参加いただいた。

セレモニーは、これから活動を共にする生徒と受け入れ先が顔を合わせ、活動に向けた相互理解を深める機会とした。対面で参加された方には、顔合わせ終了後、希望に応じて生徒が学園内を案内した。活動開始前に互いの顔を知り、言葉を交わす貴重な機会となった。

## 3.　実際の活動

本年度も、遠方で一定期間の滞在を伴う短期集中コースと、毎週水曜日に活動する定期コースの 2 つに分かれ、51 の企業・団体の協力のもと活動を行った。

活動内容は、農業や自然環境、地域づくり、福祉・保育、出版・メディア、ものづくりなど多岐にわたる。生徒たちは、それぞれ異なる環境の中で実際の仕事や活動に加わり、学校生活だけでは出会う機会の少ない人々と時間を共にした。

事前アンケートでは、活動への期待とともに、初対面の人とのコミュニケーションや、社会の中で責任をもって行動することへの不安も見られた。しかし、実際の活動を重ねる中で、受け入れ先の方々との関係を築き、自ら考えて行動しようとする生徒の姿が見られるようになった。

## 4.　経験の振り返り・共有

本年度は 3 回の振り返りの時間を設け、高等部 2・3 年

生、短期集中・定期コース、活動先がなるべく重ならないように、生徒自身がグループをつくり、それぞれの活動で経験したことや感じたことを共有した。

約 50 の異なる場所で活動しているため、普段の授業時間だけでは、他の生徒がどのような経験をしているのかを知る機会は限られている。異なる環境で活動する生徒同士が経験を言葉にして伝え合うことで、自身の経験を振り返るだけでなく、他者の経験を通して社会の多様な仕事や価値観に触れる時間にもなった。

活動ごとの振り返りについても、各自が振り返りシートに記録し、継続して自身の活動を振り返る機会とした。

## 5.　生徒と受け入れ先、双方の学び

活動後のアンケートでは、回答した生徒の自由記述から、主に「働くことへの認識」「人との関わり」「自己理解」の三つの側面で変化が見られた。

「働くこと」については、単に会社に勤めるというイメージだけではなく、人との関わりや社会との接点、生き方の一部として捉える視点への広がりが見られた。また、初対面の大人や異なる価値観を持つ人々との関わりを重ねる中で、対話への抵抗感が薄れ、自分から関わろうとする姿勢が生まれたという回答もあった。さらに、活動を通して自身の興味・関心や得意・不得意に気づき、将来について考えるきっかけを得た生徒もいた。

一方、受け入れ先への事後アンケートでは、生徒について「主体性がある」「対話力が高い」「自分の考えを持っている」といった声が寄せられたほか、高校生に自身の仕事を伝え、対話することによって、受け入れる側も自らの仕事の意味や価値を改めて考える機会になったという声が多く見られた。

「飛び級社会人」は、生徒が一方的に社会から何かを教わるだけの活動ではない。高校生ならではの視点や問いが受け入れ先にも新たな気づきをもたらし、双方に学びが生まれることも、本プロジェクトの大きな特徴の一つである。

## 6.　学びの共有会

3 月 7 日・8 日に行われた「まなコレ（学びの共有会）」にて、本プロジェクトの発表を実施した。本年度は参加生徒数の増加に伴い、2 日間・3 会場に分かれて発表を行った。

生徒たちは活動先ごとに、約 4 か月の活動で経験したことや、そこから考えたことをプレゼンテーションにまとめた。また、発表だけでなく、販売やワークショップなどを通して、自分たちが活動先で経験したことを来場者に伝える生徒たちの姿も見られた。

それぞれ異なる場所で得た経験を学校へ持ち帰り、自分たちなりの方法で他者に伝えることで、学外での経験を学内へ還元する機会となった。

## 7.　次年度に向けて

本年度も多くの受け入れ先の協力により、生徒たちが学校の外に出て、多様な仕事、人、価値観と出会う機会をつくることができた。また、活動することだけでなく、その経験を振り返り、他者と共有する時間を授業の中に確保したことで、経験を自分なりに捉え直すことをこれまで以上に重視した一年となった。

一方、生徒・受け入れ先双方へのアンケートからは、活動の目的や内容についての事前共有、生徒と受け入れ先とのマッチング、活動期間や回数、振り返りのあり方など、今後検討すべき課題も見えてきた。

活動規模が広がる中で、単に受け入れ先を増やすのではなく、一つひとつの出会いや経験をどのように学びにつなげていくのか。また、生徒と受け入れ先の双方にとって無理なく、継続的に関わることのできる仕組みをどのようにつくるのか。今後も実践を重ねながら、本プロジェクトのあり方を検討していきたい。

## 8.　謝辞

長期間にわたり本校の生徒たちに温かく向き合い、それぞれの活動を支えてくださった受け入れ先企業・団体の皆様に、心より感謝申し上げる。

また、受け入れ先とのご縁をつないでくださった博報堂ケトルの皆様をはじめ、校内の各部署、高等部 2・3 年生の担任をはじめとする教職員、保護者の皆様にも、活動の運営から生徒のサポートまで、多大な協力をいただいた。すべての関係者に改めて感謝を申し上げたい。

## 9.　受け入れ先企業・団体一覧（順不同）

有限会社きたもっく、harumaki design、シビック・イノベーション拠点スナバ、てらすワークショップ、特定非営利活動法人ピッキオ、有限会社ブラウンズフィールド、特定非営利活動法人共働学舎　立屋学舎/真木学舎、特定非営利活動法人 C・C・C 富良野自然塾、ホテル金甚、株式会社アトリエデフ、山小屋フィールドノート、一般財団法人水俣病センター相思社、株式会社 CNC、株式会社まめーず、株式会社クルックフィールズ、特定非営利活動法人ハーモニィカレッジ、八一農園/株式会社 SOYSCREAM JAPAN、一般社団法人フラットデザイン/シェアキッチン MIDOLINO_、カミーノ株式会社/Ome Farm、非営利型株式会社 Polaris、株式会社 TO・BI・RA（だがしや かなん）、たべごと屋のらぼう、株式会社ナチュラルスタンス/おとなりさん。小金井公園、みらいくほいくえん、株式会社 SATOCOMPANY、小杉湯/小杉湯原宿、太陽工業株式会社、株式会社婦人之友社、STEAM STUDIO、本屋 B&B、BS12「BOOKSTAND.TV」、渋谷のラジオ、一般社団法人 CO-SAKU 谷　シモキタ FAB コーサク室、KDDI 株式会社、一般社団法人まちにわ ひばりが丘、ノウマチ、一般社団法人 AOH、株式会社自由学園サービス　自由学園明日館、センスオブファン株式会社、自由学園しののめ茶寮、UNESTUDIO、学校法人自由学園　JIYU アフタースクール、特定非営利活動法人 CLOUDY、さかもと助産所、カルビー株式会社、鍛鉄工房 41 FORGE、ヒトトヒトホールディングス株式会社、株式会社 Grass Family.、ユニ・チャーム株式会社、株式会社 SHIFT、株式会社カメガヤ

## 10.　活動紹介動画（2023 年度の活動の様子）

https://www.youtube.com/watch?v=syRZFVFxPKA